

Wanna 縮約—ミニマリスト・アプローチ

内 藤 永

0. はじめに

生成文法は、1960 年代の標準理論、1970 年代の拡大標準理論、1980 年代の統率・束縛理論、そして 1990 年代に入りミニマリスト・プログラムとその理論的枠組みが大きく変化している。ミニマリスト・プログラムという高度に抽象化された理論が提出された現在 (Chomsky 1995 を参照)、データに基づく経験的妥当性の検証が今後の理論進展上で不可欠である。本論の目的は、その経験的議論の一つとして Wanna 縮約 (Wanna Contraction、以下 WC) を取り上げ、ミニマリスト・プログラムの妥当性を示すことである。

この WC の歴史を生成文法の枠組みで簡単に振り返ると、最初にこの現象を指摘したのは Baker and Brame (1972) である。その扱うデータの規模を他の構文と比較すると、大きな現象とは言い難いが、理論が進展するごとにその中心的概念の妥当性を検証するのに大きな役割を果たしてきた構文である。1970 年代の標準理論から拡大標準理論への移行期において、WC の研究課題は、縮約適用の隣接条件、特に線形順序に関わる条件を精緻化することであった。Lightfoot (1977) は、拡大標準理論で新たに導入された痕跡理論に着目し、「縮約適用には痕跡が介在してはならない」という唯一の隣接条件によってその現象が説明されることを示した。この議論は、その後、Chomsky (1977, 1980) 等において、文法の中に痕跡という概念が存在する証拠として取り上げられることになる。1980 年代に入り、理論は原理とパラメーターによるアプローチに移行し、新たな指導概念として統率理論が導入された。この理論の進展に伴い、WC の研究は、70 年代の線形順序に基づく研究から一歩進み、階層構造に基づく隣接条件の精緻化に向けられた。Aoun and Lightfoot (1984) は、従来の研究に対する反例として取り上げられたデータが統率という概念を用いて初めて説明されると主張し、統率理論の経験的証拠を示した。彼らの研究は WC に纏わるこれまでの議論を包括するものであり、この現象の理論的意味は終焉を迎えた。しかし、1990 年代に入り、生成文法がミニマリスト・プログラムと進化すると同時に、縮約適用の隣接条件で用いられていた統率という概念そのものが破棄された。

そこで、この隣接条件がミニマリスト・プログラムの中でどのように捉えるべきであるかという新たな研究課題が生じる。

本論では、ミニマリスト・プログラムにおいて原始的操作として導入されている併合(Merge)を用いて新たな縮約適用の隣接条件を提案する。さらに、これまで線形順序と階層構造の二つの側面から捉えられてきた隣接条件を簡素化し、唯一の条件に統合することを試みる。以下は、次のような構成で議論を進める。第一節では、これまで提案されたきた WC の適用条件を振り返り、その問題点を探る。第二節では、ミニマリスト・プログラムで仮定されている併合という操作を導入し、新たな分析を提示する。そして、この分析をデータに照合して経験的に妥当であること、そして第一節で指摘した問題が解決されることを示す。第三節では、本論のまとめを行う。

1. 過去の分析とその問題点

WC のこれまでの研究は、縮約が適用される “want” と “to” の間の隣接条件に焦点が当てられてきた。その隣接条件は、大別して、線型順序に基づく条件と階層構造に基づく条件の二つの側面から研究が進められてきた。これらの二つのアプローチを順次振り返り、その問題点を明らかにするのが本節の目的である。

1.1 線型順序に基づく隣接条件

1970 年代に痕跡理論が導入されてから 1980 年代の GB 理論へと進展を遂げるまで、隣接条件に関する議論は、線型順序に基づくものであった。“want” と “to” の間に音声形式を持つ要素が介在した場合に縮約が阻止されることは自明である。しかし、問題となったのは、Baker and Brame (1972) の論文の中で報告された、WH 移動の後に残された痕跡もまた縮約を阻止するという現象である。そこで、空範疇の中でも一体どのような特性を持つ範疇が縮約を阻止するかを解明することが研究課題となった。

この縮約を阻止する空範疇に関する一般化を提出したのが Jaeggli (1980) である。彼は、Chomsky (1980, 1981) で導入された抽象格に関する理論に基づいて、次の一般化によって WC の現象が捉えられるとした。

- (1) 格表示された痕跡は縮約を阻止するが、格表示されない痕跡は縮約を許す。

(1) の仮定によれば、格を必要とする WH 句の痕跡は WC を不可能にするが、格を必要としない NP 痕跡、PRO は WC を許す*1。この一般化は、下記の (2)～(4) のパラダイムに対して説明を与える。

- (2) a. Who_i do you want to kiss t_i?
 b. Who do you wanna kiss?
 (3) a. Who_i do you want t_i to kiss you?
 b. *Who do you wanna kiss you?
 (4) a. John_i seems t_i to be outside.
 b. John seemsta be outside.

(2 a) の文では、WH 句が埋め込み節の目的語の位置から移動しているが、このとき (2 b) が示すように WC が可能である。しかし、(3) が示すように、WH 句が埋め込み節の主語の位置から移動したとき、WC は不可能である。この事実は、(2) の “want” と “to” の間には、格標示を受けない PRO しか存在しないが、(3) の “want” と “to” の間には、格標示された WH 痕跡が介在することから説明することができる。つまり、(3) の痕跡は、(1) の仮定により、WC を阻止するので、WC 構文を生成することが不可能となる。

一方 (4) の文においても、“seems” と “to” の間に痕跡が介在するが、NP 移動の痕跡は WH 移動の痕跡と異なり格標示を受けない。すると、(1) の仮定により、格標示されない痕跡は WC を禁止しないので、WC が可能であると正しく予測することができる。

この Jaeggli の格理論に基づく分析を、ミニマリスト・プログラムの照合理論の観点から捉え直しているのが Kitahara (1993) である。照合理論では、従来、格の付与者と被付与者の関係にあった範疇がいずれも格素性を持ち、その格素性が互いに照合することによってそれぞれの範疇が認可される。Kitahara は、この格素性が可視的統語部門で照合を終えたものと、照合されなかった要素の区別に着目して、WC に関する次の条件を提出している。

- (5) ある範疇 Z が音声部門で可視的であるのは、Z が未照合の素性を持っているとき、そしてそのときのみである。
 (6) X と Y が縮約を受けるのは、X と Y の間に音声部門で可視的な範疇が存在しないときだけである。

(5) によれば、音声に関わる素性を持つ範疇 (例えば、NP、副詞句)、そして照合を完了していない格素性を持つ範疇 (例えば、WH 痕跡) は、PF 部門において可視的である。これらの範疇が “want” と “to” の間に介在した場合、(6) の適用条件を満たさずに、WC を行うことができない。

この仮定によれば、(2)～(4) のパラダイムにおいて、格照合を終えていない (3) の WH 痕跡のみが PF において可視的であり、WC を禁止すると正しく予測される。また (2)～(4) のパラダイムに加えて、(7) のように音声的に可視的な NP が介在する文が WC を許さない事実について

も、(5)と(6)の仮定から統一的に説明することができる。

- (7) a. I want Mary to win the race.
b. *I wanna Mary win the race.

(7)において、“Mary”はPFにおいて音声素性を持つために可視的であり、“want”と“to”の間に介在する要素であるのでWCを阻止することになる。

JaeggliとKitaharaの格(照合)理論に基づくこの分析は、一見したところWCに関わるパラダイムに対して綺麗な説明を与えているようである。しかし、彼らの分析はいくつかの問題点がある。一つは、格標示を受けた、あるいは照合を終えていない格素性がPF部門においてなぜ可視的であるのかという根本的な疑問が以前として残り、WCの現象の記述に止まっている。さらに言うならば、Chomsky (1995:230)によると、PF部門では非音声素性は計算の過程で削除(eliminate)されるので、WCのようなPF部門の操作において形式素性の一つである格素性に言及した条件は好ましくない*2。

この根本的な問題に加えて、Kitaharaの分析には次のような技術的な問題が含まれている。ミニマリスト・プログラムでは、いわゆる動詞句内主語仮説が採用されている。この仮説に基づいて(3)の文の派生をもう一度考えてみよう。

- (3') Who_i do you want t'_i to t_i kiss you

WH句は、“t'_i”の位置に基底生成され、循環的に移動して主節のCPの指定部にまで移動する。その際に、(5)の条件によってPFで可視的であるとみなされる範疇は、格素性の照合が行われていない“t_i”であり、中間痕跡の“t'_i”ではない。すると、“want”と“to”間に素性の照合が完了していない要素は介在しないことになるので、(3')ではWCが可能であると誤った予測を立てることになる。つまり、動詞句内主語仮説を採用する以上は、“want”と“to”の間に介在するは、PFでは削除される中間痕跡のみで、元位置の痕跡が介在することはない。ここではWCが不可能という予測が成立するが、これは事実と反する。したがって、このKitaharaの分析は、ミニマリスト・プログラムに基づくならば、記述的妥当性に欠くものである。

1.2 階層構造に基づく隣接条件

これまでは、線型順序に基づく隣接条件について振り返り、主に理論的な側面から問題点を指摘した。しかし、この線型順序による分析では、経験的に捉えることのできない事実も存在することがPostal and Pullum (1978)によって指摘されている。彼らはいくつかのデータを示した上で、生成文法の枠組みではこのWCの現象は捉えられないとした。

その後、生成文法ではGB理論へと理論的展開があり、この新たな枠組みでAoun and Lightfoot (1984) が Postal and Pullum に反論する形で、WC の分析を提示した。彼らは、GB 理論の中心的な概念である、統率理論を用いて、WC の適用条件を次のように述べている。

- (8) “want” と “to” が従来議論されてきた意味で隣接していると仮定した場合、“to” が “want” に付加できるのは、“want” によって統率されているときのみである。

(Aoun and Lightfoot 1984 : 467)

(8)によると、“want” と “to” が単に線型順序で隣接したときに WC が許されるのではなくて、階層構造上隣接している “want” が “to” を統率するときに WC が適用可能である。Aoun and Lightfoot は、このより制限された条件によって、Postal and Pullum が指摘した問題を含めて、WC に関する言語事実がすべて説明できると議論した。その議論の基本的な部分は、Chomsky (1986)、Browning (1991)、Barss (1995) 等によって支持されている。

この Aoun and Lightfoot の分析は、記述的妥当性は極めて高いものであるが、彼らが WC の適用条件に用いている統率はミニマリスト・プログラムにおいて既に破棄された概念である。そこで、理論上の要請から WC の適用条件をより原始的な概念によって再構築しなければならない。また、(8)の条件は、階層構造と線型順序の両方の隣接条件に言及した条件であり、極めて記述的な条件と言える。次節では、ミニマリスト・プログラムで仮定されている数少ない道具立てによって WC の現象が捉えることができ、さらに WC の適用条件が簡素化できると議論していく。

2. ミニマリスト・アプローチ

前節では、これまでに WC の適用に関して、線型順序と階層構造の二つの側面から隣接条件が提出されてきたことを見た。この節では、WC の現象を捉えるためには、この二つの側面を見る必要はなく、併合 (Merge) という概念に基づいた条件で WC を一括して説明できることを示す。以下の議論では、まず初めにこの新たな条件を提示し、WC の典型例がどのように説明されるかを見る。次に、ここでの分析の利点を取り上げ、最後に、ここでの分析の潜在的問題点とその解決案を見る。

2.1 ペア句構造と併合に基づく隣接条件

ミニマリスト・プログラムでは、GB 理論の重要な下位理論であった X^{bar}理論が破棄され、集合の概念を用いて句構造を構築する理論が取り入れられている。この理論によると、句構造は、併合、あるいは移動の操作を繰り返し適用することにより、語と語が連接 (concatenate) されて構築される。また、Epstein (1995) によれば、これまで仮定されていた、統率、構成素

統御、姉妹、指定部・主要部等の統語関係は、原始的な概念としては破棄され、接続に基づいて統一的に表記される。このように、ミニマリスト・プログラムにおける句構造や統語関係は、非常に数少ない道具立てによって表される。

ここでは、WC に関してもその適用条件は、この接続あるいは、併合という操作に基づいて述べるだけで十分であると提案する。具体的には、WC の適用条件として (9) を提案する。

- (9) X と Y に縮約が適用されるのは、X と Y が併合されたときのみである。

“want” と “to” を例にすると、これらの要素が縮約を受けるためには、“want” と “to” が縮約規則が適用されるときに、(10 a) のように併合されていなければならない。(10 b) のように、“want” が XP と併合され、“to” が X と併合された場合、すなわち “want” と “to” が直接併合されていないときは、(9) に合致しないので WC が不可能となる。

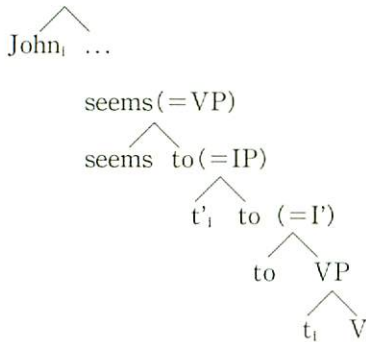
- (10) a. (10) b.

それでは、(9) の条件のみで、WC 構文の現象が捉えることが可能であるかを検証していく。まず初めに、WC の適用を許す文の典型例を見ることにする。

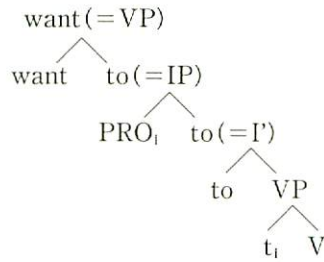
- (11) a. John seems to be outside.
b. John seemsta be outside.
(12) a. I want PRO to be outside with John.
b. I wanna be outside with John.

例文 (11) と (12) は、NP 移動の痕跡と PRO がそれぞれ WC を阻止しないことを示している。これらの文の派生を考えてみよう。併合と移動の操作が繰り返し適用され、派生が最終的に Spell-Out が適用されるときに到達したと仮定する。その派生構造は、集合の概念を用いず、非形式的に樹系図で表すと、それぞれ (13) と (14) のようになる（議論に直接関連しない部分は省略した）。

(13)



(14)



(13)に縮約規則が適用されるとすると、“seems”と“to”は、併合によって結び付けられている。したがって、(9)のWCの適用条件を満たすことになり、WCが可能であることを正しく説明することができる。(14)の樹系図を見ても、“want”と“to”が併合によって直接結び付けられているので、(9)により、WCが可能であると正しく予測することができる。ここでの分析では、動詞と“to”が併合されていることが縮約規則適用の唯一の条件であるので、“to”(IP)の指定部に、(13)のようにNP痕跡があっても、あるいは(14)のようにPROがあっても、それらは縮約の適用には無関係である。

次に、WCを許さない文の典型例を見ることにする。

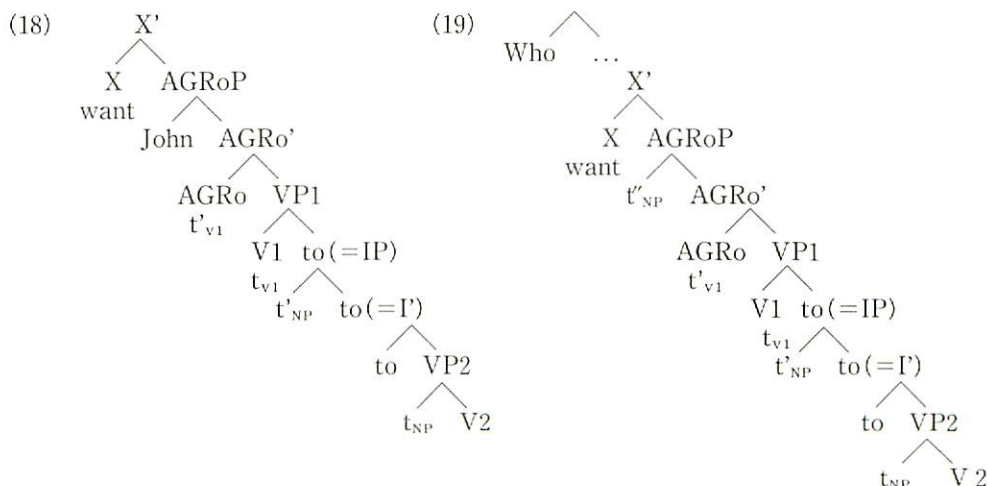
- (15) a. I want John to be outside with me.
 b. *I wanna John be outside with me.
- (16) a. Who do you want to be outside with you?
 b. *Who do you wanna be outside with you?
- (17) a. Who do you want to kiss?
 b. Who do you wanna kiss?

(15)は、音声形式を持つNPが“want”と“to”の間に介在したときに、(16)は、埋め込み節の「主語」がWH移動したときに、WCが不可能であることを示す。(17)が示すように、埋め込み節の「目的語」をWH移動させたときには、WCは可能である。(15)と(16)の例文は、“want”と“to”の間に音声形式を持つ要素が存在するか否かがWCの適用可能性に関わっていないことを示している。また、(16)と(17)の例文では、“want”と“to”の間にいずれもWH移動の際の中間痕跡が介在しているが、その中間痕跡の存在もWCの適用可能性に無関係であることを示している。

この(15)～(17)のパラダイムと、上で見た(11)と(12)の例文を合わせて考えたとき、WCの

適用の可否が、一体どのような要因によって線引きされているのだろうか。私見によると、このパラダイムにおいてその要因となっているのは、“want”と“to”の間に介在する要素ではなくて、“want”が目的格の素性を持つか否かである。WCが不可能である(15)と(16)においてのみ、埋め込みの主語の格素性は、“want”によって照合を受けている。その他の“want”と“to”の縮約が可能である例文においては、埋め込みの主語の格素性は、“want”以外の要素によって照合を受けている。すなわち、NP移動に関わる(11)においては、主節の時制(Tense)によって、埋め込み節の主語がPROである(12)と(17)においては、埋め込み節の時制によって、それぞれ素性の照合が行われている。まとめると、WCが不可能である文の“want”は目的格の格素性を持つが、WCが可能である文の“want”は格素性を持たないという一般化が得られる。それでは、この“want”の格素性に関わる特性がなぜWC適用の可否に影響するのだろうか。

Boskovic (1995)、Koizumi (1993)、Ura (1993)等は、例外的格付与(Exceptional Case Marking)構文では、動詞の目的格素性と埋め込み節主語の格素性の照合が Spell-Out 適用以前に行われるとしている。この分析によると、埋め込み節の主語は、主節にある AGRoP の指定部に、素性の照合のため可視的に移動する。また、主節の動詞も、AGRoP より高い位置にある機能範疇の主要部に可視的に主要部移動する。このような例外的格付与の特性が、ここで議論している“want”にも拡張できると仮定してみよう。すると、Spell-Out が適用される時点で、(15)と(16)の派生構造は、概略次の(18)と(19)のようになる。



(18)において、ここでの仮定により動詞“want”の格素性の照合が可視的に行われるので、動詞は AGRoP の主要部に移動する。名詞句“John”は、まず初めに埋め込み節の VP 2 内から EPP 素性の照合のために IP の指定部に立ち寄り、次に格素性の照合のためにさらに AGRoP の指定部に移動する。そして、AGRoP 内で格素性の照合が行われる。続いて、“John”は AGRoP

の指定部に留まるが、動詞はさらに上位の機能範疇の素性を満たすために主要部移動する。

(18)において、VP 1 と AGRoP の主要部は痕跡であり、PF においてこれらの投射は何ら役割を果たさないことから、削除される可能性がある。しかし、Chomsky (1995: 280) によれば、派生の段階である項 (term) を “erase” することはできない。したがって、WC の規則が適用される時点では、(18) のように VP 1 と AGRoP は痕跡として残留することになる。すると、(18) において、“want” と併合されている要素は、X の主要部、あるいは AGRoP であり、“to” と併合されている要素は、主要部が痕跡である VP 1 であり、“want” と “to” が直接併合された関係ではない。これは (9) の WC の適用条件を満たしていないので、(18) では WC が不可能であると正しく予測することができる。

次に (19) の派生を考えてみよう。この文においても、(18) と同様に、動詞 “want” の格素性の照合は Spell-Out 以前に行われるので、動詞は AGRoP の主要部、WH 句は AGRoP の指定部にそれぞれ可視的に移動する。次に、それぞれ、動詞は上位の機能範疇の素性を満たすために、一方 WH 句は主節の CP の素性を満たすために、さらに可視的移動をする。ここで Spell-Out が適用され、次に WC が適用されるが、(18) と同様に、(19) においても “want” と “to” が直接併合された関係にはないので、WC は不可能ということになる。

2.2 併合に基づく WC 適用条件の利点

ここまでは WC の現象についての典型例が (9) の併合に基づく WC の適用条件から説明されることを示した。この節では、ここでの分析の経験上の利点を見て、そして第一節で指摘した問題がここでの分析によると解決されることを見る。

Postal and Pullum (1978, 1982) は、従来の生成文法の枠組み、あるいは線型順序に基づいた隣接条件では捉えることができないと反論し、いくつかの反例を提出している。ここでは (9) の WC 適用条件が前節の典型例だけでなく、これらの反例をも説明できることを示す。

まず初めに、(20) と (21) の例文を考えてみよう*³。

- (20) a. I want [to dance] and [to sing]
 b. I wanna dance and sing.
 c. *I wanna dance and to sing.
 d. *I wanna to dance and na sing.
- (21) a. I don't [need or want] to hear about it.
 b. I don't needa or wanna hear about it.
 c. *I don't needa or want to hear about it
 d. *I don't need to or wanna hear about it.

(20 a)、(20 b) において、“and” を挟んで “want” と “to” の縮約が可能である。ただし、(20 c)、(20 d) が示すように、等位項の片方のみに WC を適用させることはできない。(21 a)、(21 b) においても、“or” によって結び付けられた動詞の両方に縮約規則を適用できる。しかし、ここでも (21 c)、(21 d) が示すように、片方の動詞にのみ縮約規則を適用させることはできない。

線型順序に基づく隣接条件では、(20) の二つ目の “to” が、そして (21) では “need” が、縮約を起こす相手と隣接関係にないことから、縮約が不可能であると誤って分析してしまうという問題点があった。一方、併合に基づいたここでの分析はどうであろうか。ミニマリスト・プログラムでは、(22) と (23) に示したように、各項の線型順序は形態部門の出力までは決定されないと仮定されている。

(22) 線形順序は形態部門の出力に適用される。

(23) LF 部門、あるいはニューメレーションから LF に至るまでの計算には線形順序は役割を果たさない。(Chomsky 1995 : 334)

この仮定によると、併合、あるいは移動の適用によって構築された派生構造は、形態部門の出力まで線型順序とは無関係な集合によって表記される。WC が注 2 で仮定しているように形態部門において適用される規則であるならば、その派生構造は集合によって表され、等位接続詞によって結ばれた項の間の線型順序は表記されない。例えば、(20) の “to dance” と “to sing” は、等位接続詞 “and” に結ばれているが、そのどちらが先行しているかは集合では表記されない。すると、“want” と接続されている項は、“to dance” であるとも、“to sing” であるとも考えることができる。これらの要素は、条件(9)を満たしているので WC の適用が可能である⁴⁴。

(21) についても、“need” と “want” が、等位接続詞 “or” によって結ばれていて、集合論上どちらが先行しているかは決定されていない。そこで、“need” と “want” のいずれもが、“to” に接続されていると考えることができる。したがって、この (21) においても WC が適用可能であると正しく予測することができる。

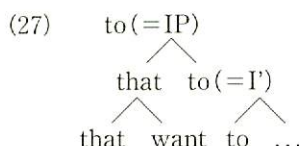
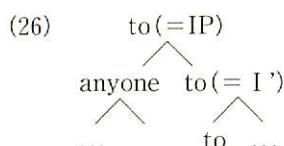
(20) と (21) の (c、d) の例文が非文であるのは、この WC の規則に、“Across-the-board” という一般的な規則の適用条件がかかると仮定することで解決できる。すなわち、これらの (c、d) の例においては、WC の適用が等位項の片方のみに適用されているという理由で排除することができる。

次に、Postal and Pullum (op. cit.) が提出した (24) と (25) の例文についても考察してみよう。

(24) I don't want anyone [who continues to want] to stop wanting.

(25) We cannot expect [_{NP} that want] to be satisfied.

(24)と(25)において、いずれも“want”は線型順序で“to”と隣接関係にあるが、WCは不可能である。この二つの文の関連する部分を、樹系図で非形式的に表すと、それぞれ(26)、(27)のようになる。



(26)から明らかなように、“to”と併合されているのは、“anyone”であって“want”ではない。また、(27)においても、“to”と併合されているのは、“that”であって“want”ではない。すなわち、いずれの派生においても“want”と“to”が直接併合された関係にはないので、(9)のWCの適用条件を満たさず、WCが不可能であることが説明される。

このように、ここで提出したWCの適用条件(9)は、WCの典型例だけでなく、他のデータに対しても説明を与えることができ、記述的にも妥当であると言える。また、さらなる利点として、この条件を設定することで第一節で取り上げた過去の分析の問題を解決することができる。

1.1節で指摘した Jaeggli と Kitahara の問題は、WC適用の際に“want”と“to”の間に介在できる要素について規定的条件を設けたことにあった。ここでの分析では、縮約規則が適用される要素間に介在する要素については一切言及していないので、介在する要素について規定を設ける必要は一切ない。1.2節で指摘した Aoun and Lightfoot の問題は、ミニマリスト・プログラムで既に破棄された統率に基づいてWCの適用条件を設けたことであった。ここでの条件は、言語理論を構築する上でどのみち必要である、併合という操作にのみ言及したもので、Aoun and Lightfoot の問題は解決されている。したがって、過去の分析の問題は、ここでの分析によってすべて解消されている。

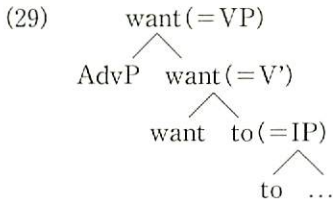
2.3 分析の潜在的問題点

これまで、WCに関わる主要なデータのほとんどが(9)の適用条件によってすべて説明されることを見てきた。この節では、ここでの分析の反例と思われるデータについて議論する。下記の(28)を考えて見よう。

- (28) a. I want very much to go to the game this evening.
 b. *I wanna very much go to the game this evening.

(28)は、“want”と“to”の間に副詞“very much”が介在したとき、WCが適用不可能であ

ることを示す。この副詞は、動詞句を修飾していることから、下記の(29)のように動詞句の投射内に付加した形で生成され则认为られる。(29)において、“want”と“to”は併合された関係にあるので、ここでの分析ではWCが可能であると誤って予測してしまう。



しかし、語順を考慮した場合、(29)の構造から(28)の語順を得ることはできない。正しい語順を得るための一つの可能性として、“want”がより上位の機能範疇に主要部移動するという解決法があるが、副詞が介在したときにだけそのような移動が要請されるという仮定はいかにも不自然である。そこで、ここでは(29)は基底構造であり、その後に埋め込み節の“to go...”全体が外置の操作を受けて、VPより上位の投射、例えばIPに付加したものと考えることにする*⁵。

実際、(28)の埋め込み節に主語を加えた(30)の例は、この外置による分析を支持するようである。(a)と(b)の対比は、埋め込み節の主語が“want”によってではなく、“for”によって格標示を受けていることを示す。つまり、埋め込み節が外置を受けたために、“want”によって格標示が受けられず、“for”が挿入されたと考えられる。

- (30) a. I want very much for John to go to the game this evening.
 b. *I want very much John to go to the game this evening.

もしここで仮定するように埋め込み節がIPに付加されているとするならば、WCが適用される時点で、“want”と“to”は併合された関係ではなくなるので、WCが不可能ということになり、(28)の非文法性を捉えることができる。

次に、(31)の例文を考察してみよう。

- (31) a. I don't want [to flagellate oneself in public] to become standard practice in this monastery].
 b. *I don't wanna flagellate oneself in public to become standard practice in this monastery.

(31)の例文は、Barss (1995) が Postal and Pullum (1982) から引用したものである。(31 a)において、“want” と “to flagellate...” は併合された関係にはないので、WC ができないと正しく予想することができる。ここでの問題は、“to become...” が “want” と併合されている関係であるので、“to flagellate...” を挟んで、WC が可能であると予測する点である。というのも、ここでの WC の適用条件(9)は、X と Y が併合されているか否かのみが関連し、X と Y の間にどのような要素が介在しても構わないことになっているからである。

この問題点については、(31)の “want” が格素性を持ち、2.2 節の(15)と(16)で見た文の派生と同様に、ECM の形を取っていると考えることで解決することができる。この例文の原典である Postal and Pullum (op. cit.) を見ると、彼らは次のようなコントラストがあることを指摘した上で、(31 b) の非文法性を議論している。

(32) a. I don't want it to become standard practice in this monastery to flagellate oneself in public.

b. ? I don't want to flagellate oneself in public to become standard practice in this monastery.

(32 a) が示すように、“to flagellate...” を外置した場合、“want” の補部には虚辞の “it” が生起する。

Authier (1991)、Naito (1995) によれば、このように目的語の位置に虚辞が現れる文においては、主節の動詞がその語彙特性として格素性を持ち、その格素性の照合のために虚辞が出現する。彼らの分析を仮定すると、(32 b) の文においても、“want” は格素性を有していて、先の(15)と(16)と同様に、主節に AGRoP が生成される派生と考えられる。そして “to flagellate” が “want” との素性の照合のために、Spell-Out 以前に主節の AGRoP に可視的に移動していると考えられる。したがって、(32 b) において、“want” と併合されている要素は “to” ではないので、WC の適用が不可能と分析される。したがって、(28)や(31)のような一見反例と思われる文についても、ここでの WC の適用条件(9)から説明することができる。

3. 結び

この論文では、WC について考察した。WC に関する従来の分析では、線型順序と階層構造のいずれか、あるいは両方に言及した隣接条件に基づいてその適用条件が定義されていた。これらの分析は、理論上、そして記述上の不備があった。そこで、本論では、WC 適用に関する隣接条件を、併合に基づく条件(9)に統一すべきであると提案した。この提案によると、WC に関するすべてのデータに説明を与えることができる。また、ここでの WC の適用条件は、線型順序と階層構造には言及せず、唯一併合という操作にのみ言及していることから、“simplicity”

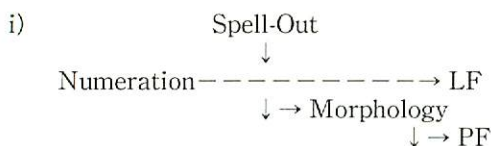
という点を考えても理論上の利点がある。その併合操作は、言語理論を構築する上で、どのみち必要な概念であり、その点でここでの提案はミニマリスト・プログラムの精神に合致するものである。さらに付け加えるなら、本論は、これまで理論から導き出されてきたベア句構造理論の妥当性を経験的側面から支持するものである。

注

1. 空範疇の中には pro も存在するが、英語は pro 言語ではなく、議論には直接関係しないのでここでは無視する。

2. 縮約規則の適用されるレベルは、Chomsky and Lasnik (1977) では、形態部門、また Lightfoot (1977)、Jaeggli (1980)、Aoun and Lightfoot (1984)、Chomsky (1986) 等では、PF 部門であるとされている。

ミニマリスト・プログラムでは、下記の図で示されたように、Spell-Out から PF インターフェイスまでのいわゆる PF 部門の中に、形態 (Morphology) 部門が介在すると仮定されている。ここでは縮約の規則が、PF 部門の中でも、特に形態部門の出力以前に適用されると仮定して議論を進める。関連する議論については、2.2 節を参照。



3. ここでは、Postal and Pullum (op. cit.) の例文の他に、Aoun and Lightfoot (1984) で示された例文を (c, d) として加えてある。

4. 等位項が、線型順序には関係なく、異なる次元に生じているという可能性が、Aoun and Lightfoot (1984) においても述べられている。

5. この分析は金子義明氏からの貴重な助言によるものである。

参考文献

- Andrews, Avery (1978) "Remarks on *it* Adjunction," *Linguistic Inquiry* 9, 261-268.
 Aoun, Joseph and David W. Lightfoot (1984) "Government and Contraction," *Linguistic Inquiry* 15, 465-473.

- Authier, J. M. (1991) "V-Governed Expletives, Case Theory, and the Projection Principle," *Linguistic Inquiry* 22, 721-740.
- Baker, C. L. and Michael K. Brame (1972) "'Global Rules': A Rejoinder," *Language* 48, 51-75.
- Barss, Andrew (1995) "Extraction and Contraction," *Linguistic Inquiry* 26, 681-694.
- Boskovic, Zeljko (1994) "Wager-Class Verbs and Existential Constructions: A Case for Greed, Lowering, and Partitive Case Assignment," m. s., University of Connecticut.
- Bresnan, J. W. (1971) "Contraction and the Transformational Cycle in English," m. s. MIT.
- Browning, M. A. (1991) "Bounding Conditions on Representation," *Linguistic Inquiry* 22, 541-562.
- Chomsky, Noam (1977) *Essays on Form and Interpretation*, North-Holland Publishing Company, Amsterdam, The Netherlands.
- Chomsky, Noam (1980) *Rules and Representations*, Columbia University Press, New York.
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York.
- Chomsky, Noam (1995), *The Minimalist Program*, the MIT Press.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1977) "Filters and Control," *Linguistic Inquiry* 8, 425-504.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1978) "A Remark on Contraction," *Linguistic Inquiry* 9, 268-274.
- Epstein, Samuel (1995) "Un-Principles Syntax and the Derivation of Syntactic Relations," m. s., Harvard University.
- Jaeggli, Osvaldo A. (1980) "Remarks on *To* Contraction," *Linguistic Inquiry* 11, 239-245.
- Kitahara, Hisatsugu (1993) "Contraction: PF Evidence for the Theory of Feature-Checking," *Harvard Working Papers in Linguistics* 3, 120-127.
- Koizumi, Masatoshi (1993) "Object Agreement Phrases and the Split VP Hypothesis," *MIT Working Paper in Linguistics* 15, 99-148.
- Lakoff, George (1970) "Global Rules," *Language* 46, 627-639.
- Lasnik, Howard and Juan Uriagereka (1988) *A Course in GB Syntax*, the MIT Press.
- Lightfoot, David (1977) "On Traces and conditions on Rules," in P.W. Culicover, T. Wasow, and A. Akmajian, eds., *Formal Syntax*, 207-237. Academic Press, New York.
- Naito, Hisashi (1995) "Object Expletives and AGR-based Case Theory," *Explorations in English Linguistics* 10, 33-50.
- O'Grady, William D. (1980) "Interpretive Rules and *To*-Adjunction," *NELS* 10, 345-353.

- Postal, Paul M., and Geoffrey K. Pullum (1978) "Traces and the Description of English Complementizer Contraction," *Linguistic Inquiry* 9, 1-29.
- Postal, Paul M., and Geoffrey K. Pullum (1982) "The Contraction Debate," *Linguistic Inquiry* 13, 122-138.
- Ura, Hiroyuki (1993) "On Feature-Checking for WH-Traces," *MIT Working Paper in Linguistics* 18, 244-280.
- Zwicky, Arnald M. (1970) "Auxiliary Reduction in English," *Linguistic Inquiry* 1, 523-536.